

ディケンズ・フェローシップ日本支部 フェローシップレター 1

月が変わり、夏休みも目と鼻の先となりましたが、会員の皆様にはお変わりございませんか。

さて1994年度の春季大会は、6月11日(土)午後1時20分より大阪市立大学杉本学舎法学部棟11階大会議室にて開催されました。梅雨入りが宣言された直後ではありましたがさわやかな晴天に恵まれ、全国各地から約80名のフェローが参集しました。

1時20分定刻発車で、まず小池滋支部長より開会のご挨拶があり、本年度の秋の総会が10月8日に東京女子大学の善福寺キャンパスで行なわれる予定であること、また来年度の春季大会は、佐々木徹氏のお世話により6月3日に京都大学で開催されることになっているというアナウンスがありました。盛りだくさんのプログラムのトップは成蹊大学の川澄英男先生の研究発表です。ディケンズが晩年に行なったアメリカでのパブリック・リーディングについて、現地での評判、ディケンズならびに同行の人びとによる印象などさまざまな角度から丁寧に調べあげた興味深い研究の一端を披露されました。ついで大阪大学のEdward Costigan氏によって「Retrospect and Expectation: The Life of David Copperfield and Pip」という題名の講演が行なわれました。まずコスティガン氏より講演題目が羊頭狗肉(?)である旨の断りがありました。『コパーフィールド』に加えて『遺産』まで含めると1時間の講演に収まりきらないので、この場では『コパーフィールド』のみを扱われるということです。過ぎ去ったことの「回想」であると同時に、同時代的に展開する「物語」でもあるかのような『コパーフィールド』の文体をコスティガン氏は見事に分析されたので、それと『遺産』を絡めたらどうなるのだろうと、大いなる期待を感じさせられました。

熱のこもった発表・講演で時間が超過したおかげで予定より大幅に遅れて、シンポジウムの開始です。「ディケンズと挿絵画家」という、ディケンズの作品を研究する上で極めて重要なテーマをめぐって、3人の先生がお話しになりました。まずは司会兼講師の松村先生。駆け出しのディケンズが堂々たる大家であったクルックシャンクとの関係においていかに優位を保とうとしたか、オリヴァー・トウイストの挿絵を用いながらのお話でした。次に話されたのは滋賀大学の谷田博幸先生です。先生はご専門の美術史の立場から、「ディケンズの挿絵画家といえばフィズ」であったが「フィズの作家はディケンズ」とは必ずしもいえないということをお話ししながら示されました。しかしこれにもまして興味深かったのは、当時の挿絵画家が実際にどういう手順で仕事をしたか、すなわち銅版および木版の挿絵の製作方法、またそれらをいかに見分けるかといったことに関する詳細な御紹介でした。とりをとったのは、わが支部の会長小池滋先生。先生はディケンズが、最後の挿絵画家ルーク・ファイルズにたいしていかに信頼をよせていたかを、『ドルード』の結末をディケンズが世界でただ一人ファイルズだけに教えていたという事実を絡めながらお話しになりました。いずれの先生のお話も特に細かいディテールが面白いのにも関わらず、時間の切迫によりかなりの部分を端折って、骨組みのみをごくかいつまんでお話しになるという結果となったのは、かえすがえすも残念でした。というわけで、最後は特急列車さながらに途中駅をとばしながらではありましたが、5時30分終着駅に無事到着したという次第でした。

引続き大阪市立大学構内の田中記念館に場を移します。小池会長のご挨拶のあと、大阪市立大学の文学部英文科の栗山稔先生の乾杯の音頭を頂戴して一同乾杯、先ほどまでとは一転して和やかな雰囲気懇親会となりました。三々五々集まって、「昼の部」で残った議論の続きをする方がた、旧交を温める者たち、新たに友人を作る人びと...といつもながらの風景が繰り広げられました。

今回の大会は近来稀に見る大勢の参加者を得て大成功に終わりました。会のオーガナイズを一手に引き受けて下さった大阪市立大学の田中さん、いろいろと御協力いただいた大阪市立大学の教員の方がた、また学生の皆さん、ありがとうございました。心よりお礼申し上げます。

最後に、会報の編集を担当している青木先生からのメッセージをお伝えします。10月発行予定の会

報に載せる原稿を募集しています。エッセイ、(小?)論文、戯文、何でも結構です。振るってお寄せ下さい。〆切は9月10日、直接支部長の小池先生の御自宅までお送り下さい。(東京女子大の英文研究室ではありません)。また、著書・論文などを発表された方もお知らせ下さい。